

留学生支援におけるピアサポートの視点
—「留学生支援実践」の取り組みから—

後藤綾文
川島一晃

三重大学共通教育センター
大学教育研究—三重大学授業研究交流誌—
第 22 号 別 冊
2 0 1 4 年 発 行

留学生支援におけるピアサポートの視点

—「留学生支援実践」の取り組みから—

後藤 綾文・川島 一晃

(学生総合支援センター)

I はじめに

三重大学では 2015 年度後期の時点で 295 名の留学生を受け入れている。アジアからの留学生が 90%以上を占め、なかでも中国からの留学生が 160 名を超す。続いて欧州からの留学生が約 3%、北米からの留学生が約 2%となっている。留学生といっても、国費留学生、三重大学の姉妹大学からの交換留学生(私費留学生)、学部正規生、大学院生、研究生など、留学生の学生としての身分は多岐に渡る。そのため、留学生それぞれに必要な手続きや情報などが異なり、渡日したばかりの頃は留学生にとって不安な日々が続くことが推測される。また、学生として学習や研究を行う以前に、出身国とは言葉も環境も異なる日本という国に来て、日常生活をするだけでストレスがかかることだろう。

留学生の支援についてはこれまでも議論されており¹⁾、²⁾、日本での適応のためにはインフォーマルな支援とフォーマルな支援の必要性が指摘されている³⁾。しかし、支援を得られても支援者や時期によっては日本での適応につながらないことも報告されている⁴⁾、⁵⁾。留学生の日本での適応と周囲の他者へ支援を求める傾向との関連を検討した研究によると、留学生は、指導教員や日本語教師に学習・研究面について支援を求めやすいこと、ただし自尊感情が低い留学生は、指導教員と同国留学生に学習・研究面について支援を求めることには抵抗があることが示されている³⁾。日本人学生には、女性の留学生が健康面、対人関係面、精神的健康面について支援を求めやすいことが指摘されている³⁾。このように、留学生は支援を得たい内容によって支援者を選んでおり、周囲に存在する支援者がそれぞれの立場から様々な支援を提供することが重要と考えられる。

学生相談の領域では、専門家によるカウンセリングだけではなく学生によるピアサポートという形での学生支援が行われている⁶⁾、⁷⁾。留学生にとっても身近なつきあいのある日本人学生の方が教員や職員よりも支援を求めやすい内容もあると推測される。日本人学生も留学生の支援に関わることで、自分の生活を振り返ったり、多様な価値観に触れたりすることができる。大学組織全体に

ついて考えても、多様な身分での留学生の受け入れが進む中で、留学生担当の教員や職員だけによる留学生支援には限界がある。日本人学生が留学生をピア(仲間)として支援するという留学生支援を考えていく必要性は、今後より高まっていくだろう。

以上より、本稿では共通教育科目「留学生支援実践」における学生の取り組みについて、ピアサポートという視点から考察する。

II 共通教育科目「留学生支援実践」

共通教育科目「留学生支援実践」は、三重大学に在籍する留学生への様々な支援の実情や支援ニーズを現場に学び、留学生への支援施策を立案・実践することを通して、国際性とコミュニケーション力を育成することを授業目的とした科目である。平成 25 年度後期は、留学生を「支援」することについて考えることに重点を置き、講義を構成した。学生は一方向的に与えるものではなく、相手が望む「支援」について考え、自分が「支援」されるとき気持ちや体験についても振り返る。また、絶対的に素晴らしい「支援」があるのではなく、相手のニーズをふまえて、自分にできる「支援」をすることで継続的な「支援」が可能となる。以上を、授業での取り組みを通して、学生が気づいていけるよう、授業を進めていった。

講義全体の流れは以下の通りである。まず、留学生支援室職員に授業に協力してもらい、三重大学の留学生の特徴や留学生支援室の業務内容についての説明を受ける回を設けた。次に、体験的なワークを通して、学生が留学生自身や留学生の困り感について偏ったイメージを持っていたと気づくことを目的とした講義を行った。その後、主にプロジェクト活動を進める回を設けた。留学生支援において学生が支援できるであろうことと留学生支援室としては支援しにくいことをあらかじめ教員が留学生支援室職員より聴取し、4 つのプロジェクト案を準備した(表 1)。学生は各々の興味に応じて 3 つのプロジェクトに分かれてグループ活動を行い、1 つのプロジェクトには全履修生が携わった。グループで行うプロジェク

表 1 プロジェクト内容の概要

プロジェクト名	プロジェクト内容
国際交流イベント企画 実施プロジェクト	国際交流週間に実施するイベントについて、国際交流センター教員と共同で企画・実施する。
留学生インタビュー冊 子作成プロジェクト	留学生に母国と日本での生活(大学生活、日常生活、勉強時間、娯楽等)についてインタビューを行い、記事としてまとめて冊子を作成する。
留学生のための学内案 内ツアー計画作成プロ ジェクト	新渡日の留学生のために、留学生が三重大学生として過ごすために必要十分な場所(三重大学構内)を案内し、利用方法などを説明するツアーを計画する。
フェアウェルパーティー 企画実施プロジェクト	平成 25 年度で三重大学を去る留学生を主なゲストとして、お別れのパーティーを企画・実施する。

表 2 留学生支援実践受講生内訳

学部	人文		生物資源		工		医学部	総数
学科	文化	法律経済	資源循環	共生環境	電気電子工	物理工	看護	
学部 1 年	1	4	1		2	2	2	18
学部 2 年	5			1				

トとは、国際交流支援センターの国際交流週間期間のイベントの企画実施、留学生の母国と日本での日常生活のインタビュー冊子作成、新渡日の留学生向けの学内案内ツアー計画作成の3つである。全受講生が携わるプロジェクトは、帰国する留学生を送り出すフェアウェルパーティー企画実施である。

さらに、学生はプロジェクトグループ活動に並行して、留学生支援室や学生サービスチーム職員の協力を得て、授業時間内に留学支援室でのインターンシップを体験した。学生は3人一組となり、留学生支援室のインターンシップ実習生として、留学生支援に関わる業務の補助体験や職員の方々の業務中の様子の観察を行った。平成 25 年度後期共通教育科目「留学生支援実践」の受講者の内訳は表 2 に示す通りである。

Ⅲ 留学生支援室との連携

留学生支援室の協力を得て、留学生と主に関わる職員による講義の受講と留学生支援室でのインターンシップを行うことができた。留学生と主に関わる職員による講義により、学生たちは留学生の実情や支援について知ることができた。学生の学びのコメントを表 3 に示す。留学生支援室でのインターンシップでは、普段は見ることができない留学生支援室での実際の業務の一部を体験す

ることができたようである。学生として自分たちができる留学生支援を考えるにあたって、大学として行われている留学生に対する支援はどのようなものであるのかを知るために、留学生支援室の業務を学ぶことは必要なことである。業務内容を知る以上に、留学生支援室の職員の業務に対する姿勢、留学生との関わりを間近に目にすることができた有意義なインターンシップであった。インターンシップを終えた学生の学びのコメントからも、職員がすべての留学生の名前や渡日したかどうかなどの情報を把握しているという業務に対する姿勢や、困っている留学生に対して必要な支援を的確に行うことに驚きを感じていることがうかがわれた。実際に働く大人の姿を目にすることで、社会で働くということについて学生が意識を向ける非常に貴重な機会にもなったと考えられる。表 4 に留学生支援室でのインターンシップを通して学生が体験した学びのコメントを示す。また、学内インターンシップの取り組みとして広報室に取りあげてもらい、三重大学のホームページに留学生支援室でのインターンシップの記事が掲載された⁸⁾。

表 3 留学生支援室の職員の講義を受けた学生による学びのコメント

人文学部 1年	三重大に来ている留学生の数を初めて知りました。そして、その9割をアジアが占めているということに驚きました。また、大学にいる外国の方が全員留学生であるとは限らないということ、留学生の種類もいくつかあるということがわかりました。加えて、留学生支援室の方ができなくて学生にできることがあるということを知り、その中の少しでも実行に移すことが今回の目標だと思いました。
生物資源 学部2年	留学生は慣れない土地で生活を送るため、勉強だけでなく生活についても、多くの不安や質問があると分かりました。親元を離れていながらも勉強を頑張っている留学生が、安心して生活できるよう、いつも味方になり相談を受けることが支援する側にとって大切なことだと思いました。
工学部 1年	留学することの大変さです。中部国際空港から三重大まで自力で来れないという話や、携帯電話の契約や銀行口座の開設の話など、知らない国ではできないことがたくさんあるのだと学びました。また、頼りになる大学もできることは限られているということです。
生物資源 学部1年	留学生支援室という、事務手続きや単位の認定など私たち学生が支援をしたくてもできないようなことを行っているのかと思っていました。しかし、事務手続きの他にも生活のアドバイスをしたり、傘を貸してあげる、などといった私たちでも出来るようなこともあることを知りました。また、銀行の口座開設や携帯電話の契約などやってあげたくてもできないことがあると聞き、できるならやってあげたいと思いました。

表 4 留学生支援室でのインターンシップを通した学びのコメント

以下の点を報告してください。 1: 留学生支援室でのインターンシップ中に発見した学びを具体的に報告してください。 2: 一番印象に残った留学生支援室の一コマを具体的に報告してください。	
人文学部 1年	1. インターン中にピザの更新に来た留学生がいたので、ピザがどのような仕組みで発行されているのかを知ることができました。ピザは卒業まで有効ですが、例えば研究生としての課程から大学院に進学するときはピザの更新が必要になるそうです。私はピザがどのようなものか知らなかったもので、勉強になりました。 2. 留学生支援室はとても親しみやすい雰囲気だったので、留学生も相談しやすいだろうなと思いました。また、相談の内容をすばやく判断し、迅速に対応されていたことに圧倒されました。留学生が病気にかかった時も、職員の方が様子を見に行っていってらっしゃったようでとても心強いと感じました。
人文学部 1年	1. わたしたちが留学生支援室へ訪問した直後に留学生がボールの空気入れを貸してほしいと訪ねてきました。手続き関係だけでなく、本当に何にでも対応するんだなあと感じました。それから空気入れを待っている間、留学生に話しかけてる方がいて、ただ待たせるだけでなく、留学生とのコミュニケーションも忘れずにとる姿を見てすごいなと思いました。また、職員さんからアンケートを英訳する作業を任されたとき、地道な作業もたくさんあって大変だなあと感じました。 2. 留学生が支援室へ空気入れを借りに来た際、その時学祭の人が借りていて空気入れがその場にありませんでした。そのあと、教育学部などに電話をし、困っている留学生を全力でヘルプする姿がとても印象的でした。
人文学部 1年	1. 留学生の活動に対する奨学金の書類の仕分け作業をお手伝いさせていただきました。留学全員に対応する仕事に加え、とても少ない人数でそのような地道な作業もたくさんこなしていらっしゃるのだと改めて感じました。 2. チューターの方が留学生のことで相談に来た際、名前を聞いてだけでまだ来日していないことを瞬時に理解して対応している姿が印象的でした。あれだけ数多くの留学生が在籍しているのに、細かい情報まで頭に入っているのだと驚きました。また英語での対応が当たり前の世界なのだと感じました。

<p>医学部 1年</p>	<p>1. 私たちがいたときは留学生の方が一人も来なかったので、12月にある「滋賀バスツアー」のバスレクについて考えるというのが第一の仕事でした。いつもはバスレクをしていなかったのですが、「留学生の皆が楽しめるなら」と今回から始めようと考えているようです。バスレクは完全ボランティアですが、留学生のことを考えてそう行動できるのは素敵だと感じました。「留学生を第一に思う」ということが、支援室のみなさんが共通して持っている、大事なものだ学びました。</p> <p>2. 病気で学校へ来られない留学生のことを非常に詳しく知っていて、なおかつ、一緒に病院に行ったりしていると知り、非常に驚きました。奨学金の停止などもすべて支援室の皆さんが対応していて、行動範囲が広いなあと感じたのが、一番印象的だったところです。</p>
<p>医学部 1年</p>	<p>1. 三重大大学の留学生の人数に比べて、留学生支援室の先生方の人数が非常に少ないと感じた。私たちが行かせていただいた時間帯が遅かったせいか直接、留学生が訪ねてくることは無かったが、誰かが常に電話での対応をしていた。</p> <p>2. ある留学生の子が5月ごろにメガネを無くしたらしい。留学生支援室を訪問させていただいている間に、職員さんにそのことを相談していた。職員さんは軽くあしらうわけでもなく、いろんな部署に電話をしてそのメガネの行方を捜していた。ただのメガネの、しかも遠い昔に落としたものに、きちんと対応しているところが、たくさんの留学生の方達の信頼を得ているのかなと感じた。</p>

IV 学生の取り組み

1. 国際交流イベント企画・実施プロジェクト「インドを知ろう」

国際交流週間に行われるイベントを国際交流センター教員と共同で企画・実施した(図1)。イベントのテーマは留学生として共同してイベントを企画するインド人留学生の母国である「インドを知ろう」というテーマに決まっていた。学生たちはインドをテーマとして扱うなかで、それぞれの国から渡日した留学生が楽しめるようなイベントとなるように、国際交流センター教員とインド人留学生と意見交換しながら企画を進めた。最終的には、①インドについてのクイズ、②自分の名前をヒンディー語で書いた名刺を交換して交流することを行うことに決めた。イベント実施にあたって、自分たちが楽しいと感じるだけでなく、イベントに来てくれる留学生や日本人学生がともに楽しいと感じるイベントとするためにはどうすればよいのかと、学生たちは考えていった。たとえ

ば、日本語の理解が難しい留学生のために、クイズで使用する日本語は容易な内容にし、絵や写真を多く使うことで視覚的にも理解しやすくなるような工夫が見られた。また、ヒンディー語で書かれた名刺を交換することで、自然に交流が生まれるような体験的活動を含めていた。

このプロジェクトは他プロジェクトグループよりも一番早い時期にプロジェクト実施日があったが、人を呼び込むためにSNSを使用したり、次週の授業までにそれぞれの学生が何を準備してくるかを明確にして計画通りに進めたり、お互いに尊重し合って自分の得意なところを活かしながら準備を進めていた。自分たちでは手が足りない場合には他プロジェクトグループへの協力依頼をする姿も見られた。留学生と日本人学生との交流イベントを企画する中で、留学生も日本人学生も楽しむことができる、お互いを仲間として尊重するという、支援の基本を体験的に学ぶことができていたといえる。



図1 「インドを知ろう」企画準備中の学生たち



図2 留学生インタビュー冊子作成中の学生たち

2. 留学生インタビュー冊子作成プロジェクト

留学生に母国と日本での生活（大学生活、日常生活、勉強時間、娯楽等）についてインタビューを行い、記事としてまとめて冊子を作成した（図2）。事前に留学生支援室の職員から留学生の具体的な生活について知りたいという要望を得ていたため、まず学生は留学生支援室の職員にとっても有益な情報となることを目指して、留学生の母国と日本での生活理解に必要とされる情報を精選していった。

また、インタビューに協力してくれる留学生に負担がないように、インタビュー内容をどの順番で尋ねるかまで配慮していた。インタビューの内容は学生だからこそ思いつくような素朴な疑問も多く挙げられていた。同じ学生であり、仲間だからこそ、留学生の生活の実情を知ることや本音を聞くことができ、留学生が普段は口にしない小さなニーズを捉えることができると考えられる。完成された冊子には、インタビューに答えた留学生の本音が散りばめられており、留学生の日々の生活が具体的に想像できるような非常に中身の濃いものであった。

もちろん留学生にインタビューを行い、留学生の生活の実情を知ること、直接的に留学生支援につながっているわけではないかもしれない。しかし、留学生が渡日して感

じていることや経験していることを知ることができ、留学生支援室の職員の方にとっても日本人学生にとっても、次の支援を考える有用な情報となったといえる。インタビューをされることで、母国のことを久しぶりに多く話すことができた、知ってもらえたと感じた留学生もいることだろう。母国をじっくりと思い出す時間を日本人学生と共有できたということも、留学生にとって支援となっていると考えられる。学生たちはインタビュー冊子を作成した感想として、以下のように述べている。「インタビューをすればするほど、留学生との『感覚の違い』に驚くばかりでした。…しかし、その『違い』が逆におもしろいのです」、「三重大の留学生として生活している皆さんが日本での生活をどう感じ、日本の大学や日本人をどう見ているのかを知るとは、自分にとって新しい発見でした」、「初めは戸惑っていた留学生との交流も勇気を出して一歩踏み出してみて世界が大きく変わりました」。インタビューを通して、留学生と日本人学生が仲間としてお互いのことを知ろうとする、それこそが留学生にとって支援となっているのではないかと感じさせる感想だった。



図3 留学生のための学内案内ツアー計画中の学生たち



図4 フェアウェルパーティーの様子 その1



図5 フェアウェルパーティーの様子 その2

3. 留学生のための学内案内ツアー計画作成プロジェクト

新たに渡日してくる留学生に、留学生が三重大学生として過ごすために必要十分な場所（三重大学構内）を案内し、利用方法などを説明するツアーを計画した（図3）。学生は留学生支援室の職員にも聞き取りを行い、留学生支援室としても留学生に説明してほしい構内の場所を確認し、留学生と留学生支援室のニーズに応えることを目指した。来年度の平成26年度に新しく渡日する留学生向けに実施できるよう、授業期間ではプレ学内案内ツアーの実施を試みた。プレ学内案内ツアーであっても、留学生にとって日本語の説明が理解しやすいか、図が見やすいかなど、留学生に対する配慮がいきとどいたものになっていた。プレ学内案内ツアー後には、参加してくれた留学生から意見を聞いたり、自分たちが感じた問題点などを挙げたりして、案内すべき場所をさらに考えていった。

一方で、多くの可能性を考え、留学生に対して最上級の配慮をすることに疲弊しているような姿も見られた。ここに支援の難しさがあるといえる。すべての人が満足する支援をしようと思うと限りがなく、支援者が疲弊してしまうということが生じる。ここで重要なのは、自分たちだけが留学生を支援しているのではないことに気づき、同じ学生という仲間として、自分たちができる範囲での支援を考えることである。この視点は単なる妥協ではなく、支援する側にとっても支援される側にとっても必要な決断であると思われる。教員やSAとともにさらなる議論を交わした結果、学生たちはこの経験を通して「初めは漠然と渡日した留学生を対象にと考えていましたが、そうではなく、来て本当にすぐの留学生を対象にするのか、渡日から1か月程度たって生活に少し余裕ができた留学生を対象にするのかというのをしっかり決めることで伝えたいことの選別がスムーズにできた」と後にふりかえっている。

4. フェアウェルパーティー企画実施プロジェクト

平成25年度で三重大学を去る留学生を主なゲストとして、お別れのパーティーを企画・実施した（図4、図5）。これまで各自のプロジェクトで培ってきた企画力やチームワークを発揮し、全履修生で協力して企画した。参加した留学生と日本人学生がともに、日本の古典的遊びを体験し、笑顔が絶えない思い出に残るパーティーとなった。

V まとめ

本稿では、共通教育科目「留学生支援実践」における学生の取り組みについて、ピアサポートという視点から考察を進めてきた。本節では、これまでの考察をふまえ、「支援」することについて考える授業を通じた、学生の学びについて、学生相談に携わるカウンセラーとして考えていきたい。

「留学生支援実践」における3つのプロジェクト（国際交流イベント企画実施プロジェクト、留学生インタビュー冊子作成プロジェクト、留学生のための学内案内ツアー計画作成プロジェクト）の具体的な取り組みは異なるが、授業者が狙いとしてきたことは、「支援」について考えることを通じて「支援」の難しさを体験することである。留学生を主な対象とする企画であっても、留学生も日本人学生もどちらも楽しめることが大切であると気づいた学生がいる。留学生と日本人学生にどうしても分かち合えない価値観があることに気づいた学生もいる。自分が持っている留学生の固定されたイメージに気づかされた学生もいる。日本だからといって、日本人がすべてを知っているわけでもなく、留学生の方が知っていることもあると気づいた学生がいる。留学生向けの企画であるために、留学生の日本語理解の程度を配慮しすぎて疲れてしまったと感じた学生もいる。これらは、授業中に学生から得られた感想である。留学生支援実践の授業で授業者が伝えたかった、学生に身をもって感じてほしかった「支援」の難しさについて、直接触れてはいないものの核心に触れているように感じられる。「支援」というのは、自分から一方的に行っても相手のニーズがなければ、おせっかいはたは迷惑なものになる可能性がある。「支援」について考えることで、相手の価値観に触れ、学生は自分自身について振り返ることができていることがうかがわれる。具体的に留学生の問題や悩みを解決したという目に見える結果が示されたわけではないが、一緒の場を過ごし、相手のことを個人として尊重するというだけでも「支援」となっているのではないだろうか。そのような小さな「支援」こそ、学生によるピアサポートだからこそできることだと思われる。

また、「支援」には終わりが無い。だからこそ、自分のできる支援の範囲を勇気を持って区切ることが必要である。学生はどこまでも留学生の役に立ちたいと思い、自分のできる範囲以上にエネルギーを使ってしまい疲弊してしまう。支援したい思いが強いからこそ、疲弊する自分を責めてしまうこともある。これは、学生相談に携わるカウンセラーとして心理臨床の現場（カウンセリング場面）で感じることに類似している。基本的にカウンセリングとは、面接室のような閉じた空間でしか行われぬ。日常とは異

なる空間だからこそカウンセラーはできることがあり、それ以上にはクライアントと関わらないのである。だからこそ、カウンセラーはクライアントを無条件に肯定的に認めることができ、クライアントの体験をあたかも自分自身が体験したかのように共感できるのである。それゆえ、クライアントに対して、燃え尽きることなく継続的にカウンセリングできるのである。言い換えれば、それ以上も以下もカウンセラーはできないのである。カウンセラーとして、自分のできることの小ささを知っておかなければ、どこまでもクライアントの悩みにつきあい自分が疲弊してしまう。カウンセリング場面とは文脈が異なるが、支援したいと思う学生が体験した疲弊感は同質のものであるであろう。自分だけが留学生支援に関わっているのではなく、同じ学生という仲間としてできる範囲で支援することが、留学生にとって学生自身にとっても支援的なのである。

以上より、授業者の狙いとした、「支援」について考え「支援」の難しさを体験するという授業目的は達成されたと考えられる。しかし、学生にとって有意義な体験であった一方で、留学生支援室でのインターンシップは現場の職員に迷惑をかけていた可能性は否定できない。継続的な実施に向けて、さらに講義の趣旨説明、授業とインターンシップのスケジュール確認などを行い、留学生支援室、学生サービスチーム全体の理解を得る必要がある。これらの点は今後の課題としたい。

VI 引用文献

- 1) 松村亜里・阿部祐子 (2011). メンタープログラムによる留学生支援の試み *学生相談研究*, 31, 195-206.
- 2) 大西晶子 (2012). 留学生への相談・支援体制の現状と課題：学生相談機関における対応実態を中心に *学生相談研究*, 33, 25-37.
- 3) 水野治久・石隈利紀 (2001). アジア系留学生の専門的ヘルパー，役割的ヘルパー，ボランティアヘルパーに対する被援助志向性と社会・心理学的変数の関連 *教育心理学研究*, 49, 137-145.
- 4) Jou, Y. H., & Fukuda, H. (1995). Effect of social support form various sources on the adjustment of Chinese students in Japan, *Journal of Social Psychology*, 135, 305-311.
- 5) 周 王慧 (1995). 受け取ったサポートと適応に関する因果モデルの検討 - 在日中国系留学生を対象として - *心理学研究*, 66, 33-40.
- 6) 松田康子 (2013). 13. 「北大版ピア・サポート」の可能性を探索する授業実践の取り組み：全学教育フレ

ッシュマンセミナー「学生支援におけるピア・サポートを考える」授業実践から第2報 北海道大学ピア・サポート活動報告書 (平成23年度版), 141-151.

- 7) 法政大学 (2013). 「法政大学ピアネット」
<<http://www.hosei.ac.jp/gakuseishien/index.html>>
(2013年3月28日)
- 8) 三重大学 (2013). 「共通教育キャリア実践科目『留学生支援実践』で学生がインターンシップを行いました」
<http://www.mie-u.ac.jp/topics/kohoblog/2013/11/post-753.html> (2013年3月28日)

VII 謝辞

多忙な職務の中で講義趣旨に賛同し協力して下さった留学生支援室の職員の皆様、国際交流センターの教員の皆様に心より御礼申し上げます。